

〔赤穂義人録序〕時秋積雨新霽、戶外履聲鏗然、出而迎之、則與子復、谷勉善、及石慎微也、於是出義人録、相與讀之、讀罷繼之以泣、慨忠善之不祚、恨天道之無知、嗟理義之悅人心、嘆孟氏之不我欺、慎微曰、赤穂諸士、朝廷致之於法、而室子乃張皇其事、顯揚其行、並以義人稱之、其志則善矣、得非立私議、非公法乎、勉善曰、不然、昔孤竹二子、不聽武王之伐紂、而身距兵於馬前、今赤穂諸士、不聽朝廷之赦義英、而衆報仇於都下、二子則求仁得仁、諸士則舍生取義、雖事之大小不同、然其所以重君臣之義、則一也、是故師尙父不諱、以義人稱二子於當時、而其於武王之聖也、固無損焉、室子不諱、以義人稱諸士於今日、而其於國家之盛也、亦何妨乎、夫義二子者、不以爲非武王、義諸士者、獨以爲非朝廷、耶、子復曰、雖然尙父一言于軍、而能使二子免左右之兵、室子空談于家、而不能使諸士免法家之議、命也夫、三子者、皆長吁而退、遂收其語于簡端、以告後之讀是録者、

日東元祿癸未〇十年十月庚辰、鳩巢室直清手書於靜儉齋、

〔先哲叢談五〕佐藤直方

故赤穂侯遺臣殺吉良氏、明日跡部光海來謂曰、先生未聞乎、昨夜赤穂大石等四十七士復讐、直方曰、言誤矣、遺臣之於吉良、何有讐視之理乎、遂本諸柳宗元駁復讐議、論爲陵上者、

復主君讐

〔常山紀談二十四〕大久保長門守一本松平周防守に作る教寬の内所に奉公せし女中老、ある時心得過ちし事

有しを、女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ、中老親にもた、かれし事はなきものをと、獨言して部屋に歸り、文書て下女にもたせ、親のもとにやりぬ、二人の女房、一人は残りなんといふを、大事のことといひやる文なりとて、おして二人とも出しぬ、道にてあやしき事よ、常に二人一度に出されし事も覺えず、顔色も只ならず有しとて、文を披き見るに、まかゞの子細にて、自害するなりと書のせたり、さてこそ有べけれど、一人のはしたものは、とくゆかれよ、我は歸りておしと、むべしとて、急ぎ歸りて見るには、や自害して有しかば、夜の物打かけ小脇差の血を拭ひ、